



新  
上列妙義詣

星運堂









峯	七	本	日
好義	筑波	羽軍	日光
上	常州	羽州	羽州

社	二	十	野	上
郡馬群	郡多	郡波形	郡赤	郡赤
坐三	坐二	坐二	坐二	坐二
伊香保神社	加茂神社	赤城神社	火雷神社	貫前神社
郡位伏	郡田山	郡田山		
大圓神社	小祝神社	美和神社	倭文神社	宇藝神社
	甲波宿禰神社			

漢音吳音の辨



漢音ハ人會十行  
 意林云會十行  
 面似一五に似  
 儒者論漢子云  
 何事ハ人會十行

妙我詣  
 此度妙我詣  
 思之云々  
 有法傳一  
 子能日

高井晒我撰



大に放ちぬ  
 時より我ら  
 漢字の用ひ漢音  
 の始之又大織冠  
 の改め時  
 佛經我ら  
 吳玉の比  
 對する海  
 佛經の事  
 人始て  
 よひ尼  
 吳音

ありて今  
 佛書  
 こと  
 かく  
 由  
 家  
 傳  
 集

横  
 打  
 本  
 然  
 抄  
 本  
 然  
 抄

度  
 密  
 暗  
 志



命より新字の部  
に拾に巻を撰む  
この中流下を書信  
らざるに類し今  
や漢字を用て  
漢音長考の二  
戸小二をよと出  
ルナ

明

漢音メイ  
吳音ミヤウ  
唐音ミ

清

漢音セイ  
吳音シヤウ  
唐音シ

あまの御書に明  
徳清音とよみ又  
唯一神乃神明宮  
おのれを神宮  
明王と云ふ神  
清浄と云の別  
以知也神宮自中  
の人をえりて  
吳音の方以近  
けり小徳と云  
小徳云云に後  
如ちくあり叔  
高と云ハ六三

塘那れはるる

のひと楊州秋

魁婢れ久新や

戸田如川船打渡

堤と我ら巖窟

情送て浦社を

日務れと法中

宿瑞の茶廊と

愁ひをく重尺

間う嶽小と







同中の名流に類後

其の如く、志は後

て、よみ下すあり

別後と別改に事

を以て之を修法正しく

とあることなるがれば

字の如く、事なる

中、一字おても、事なる

らうて、に事なる

あり、あるは、重なり

なり、かゝるは、平なり

は、し、かゝるは、事なる

て、て、見、て、事、なる

子、ヨ、ウ、ス、入、り、事、なる

洞、子、の、遠、方、に、事、なる

ち、や、う、の、音、を、事、なる

わ、く、る、事、を、事、なる

用、事、を、事、なる

貝、事、の、人、に、事、なる

か、事、と、事、を、事、なる

か、事、と、事、を、事、なる

こ、事、と、事、を、事、なる

ふ、事、と、事、を、事、なる

如、事、の、事、を、事、なる

小、事、と、事、を、事、なる

沙、粒、を、捨、つ、所、古、本

梢、と、支、神、を、飛

海、と、原、神、を、歌、す

白、れ、帯、は、力、敷、す

折、し、し、屋、を、事、なる

虎、の、窟、を、日、に、歌

も、翻、り、し、て、事、なる

及、と、事、を、事、なる

於、れ、事、と、事、なる

事、と、事、なる

事、と、事、なる



いんがらを平と云や  
こととらるる唱るる  
夢と云はれざるる  
一書に世といふ  
平好むとくはつら  
と好むはよくゆづ  
去好む好むの本徳  
をてかす入声身  
をどまりせむる海  
沈約と云人上を入  
と及べし聲平平  
の石あり故人茶碗  
天目の地きとるて

如來の個子成法  
と云極中の人候  
おもも自然とに好  
わきを例續して  
用や好むははるの  
名れく唱て好む  
おし平考小唱  
我う玉のや後好む  
あまこ好むははる  
のほ好むと唱る青  
かしく解はせたふ  
あるははるはるの  
のほ好む

子好む我を無て捕

川と泊とくり聖

ふ掛曉くくもら吉

鳩果れ宿く入と漳

去檀林晴然寺哉

流くくくれ観音

堂又箕田村の橋

とくく触大はたの

孫傳能潤多男也

波と波邊源入



橋平端上箸去  
直平寝上根去  
垣平柳上堀去  
目平樋上火去  
血平智上地去  
へ部八和漢とを小  
紛々として右の  
とをたてて又も  
の洞子に解すたし  
同くたしと云  
自然とてさしとれ  
已はたす人もと

つ分たてて又も  
入部成にさす  
クナキのゆき  
下はらふもの  
をさす  
た葉突覚  
益のたてて



と多し其を四頃と  
る  
然る岩刻壇石  
城星層  
敷く輝く丸小願

流と流川の流  
流く  
は川を其水源  
又山をさす  
戸田川由岡の下



名頭字辨

右記字を凡て所  
の名を以て知るは  
通実若を一切に  
字辨を以て知るは  
そこの所の名を  
又此以て人の姓  
を以て知るは  
亦此のく二名  
右記のく二名  
字記のく二名  
サレセツのく二名

當よりて字記  
今も本姓を以て  
本と克つる名  
水姓のく二名  
あてはまはす  
左記右記を以て  
かどの名を以て  
さて一字以て  
若を以て云ふ  
中よりて字記  
知るは  
ハヒフヘホ  
一ニムメモ

舟して海に入  
と亦土地の  
海濱遠く梅  
古壇く連  
蓬生山忽谷寺の

廟小詣以廓  
れ遠跡と吊  
松風如  
深谷と  
部村







生封名懸せりん  
男女お生かしの  
本と同一の  
の(ギカキクケコハ  
くむらうが  
のんどのわりの又  
サレスセフチニ又  
其の音は八音の  
わいずい三ッ  
中(ま)の(ま)の(ま)の  
といふもむす  
也大(大)の(大)の(大)  
本(本)と(本)と(本)と

洋(洋)の(洋)の(洋)  
字(字)の(字)の(字)  
今(今)の(今)の(今)  
の(の)の(の)の(の)  
といふ(といふ)の(の)

古今大和の書

世(世)の(世)の(世)  
竹(竹)の(竹)の(竹)  
冊(冊)の(冊)の(冊)  
元(元)の(元)の(元)  
文(文)の(文)の(文)  
苑(苑)の(苑)の(苑)  
拵(拵)の(拵)の(拵)  
巻(巻)の(巻)の(巻)

井田れ関の象院  
邑産是妙紙と  
徑(径)と(径)と(径)  
又(又)及(及)に(に)糸(糸)叢(叢)石(石)  
漏(漏)と(漏)と(漏)と  
時(時)有(有)古(古)碧(碧)

に(に)と(に)と(に)  
枚(枚)を(を)剛(剛)炭(炭)れ(れ)白(白)  
戸(戸)と(戸)と(戸)  
油(油)を(を)も(も)家(家)又(又)也(也)厚(厚)  
と(と)れ(れ)磨(磨)と(と)し(し)嶺(嶺)嶺(嶺)涓(涓)



二十一史合考の時  
たしむ二千五百  
九卷ありけり又  
此の經系和漢  
帝有の大詔と云  
永樂大典小考  
卷一 宣明通記の  
第五小云永樂大  
年十二月永樂大  
典の書成らば  
先永樂の始皇帝  
御極學士解縉ホ  
いさしめてのりむ

六下古今此事物  
法書に教裁せて  
冊巻を著すらん易  
うの朕今らあ  
の書にのせる所  
事柄もしくわはめ  
大也を統るに韻  
も也考りむ  
の役をらでこを  
あごころがむ  
下は思ふて後  
五卷をん長  
はるすかきのひ

山は峰海よりと  
年よりいへ  
柳主野山車樂  
那妙義大核現  
の道場と白雲を夜

山石塔も又高嶺  
院と待り人皇四  
十九代先仁帝  
寶龜の甲州  
剣より教百れ







鑑字の七三千人凡  
凡二万二千九百卷  
一万一千五百枚  
正徳永平大典中  
の次第なる序  
文は別紙の巻末  
附書あり巻中  
大勢を以て  
刊行一布於すに  
反すて之を  
之を以て之を

の書数多むれ  
は書のし然わ  
登る

開城以来年数

後周書小成  
春秋獲麟庚申  
中が二百七十六万  
歳とせり一説  
軍籍甲冑の五千  
小高と傳ふ時は  
二百七十五万九千  
百八十六年とす

人権れ討焚岩  
踏石と橋川と有  
おの流れ弓  
おの社前  
當國一れと  
おの流れ弓  
おの社前  
當國一れと

伊香津の湯治  
五科と名と  
十二社悉  
ゆかり候  
無双し



後藤藤原今白中  
の寛政六年甲辰  
二千二百七十七年  
今に或る年數二百  
七十六万二千一百六  
十年年より  
和漢年表の紀に  
元年といはれ  
之に五考ある  
元禄の始に計  
元禄五年換極  
位の年取を記

和漢年表の紀に  
元年といはれ  
之に五考ある  
元禄の始に計  
元禄五年換極  
位の年取を記  
和漢年表の紀に  
元年といはれ  
之に五考ある  
元禄の始に計  
元禄五年換極  
位の年取を記

山勢と素直を  
三夜海海及乃心  
をと注日一  
中流渡人路  
院物法く免

上と舟井之  
有元宛為千如白  
布と一連小曝  
穿り其末深候



茶年を二百二十  
万〇二子又百〇二年  
武王允年と南解  
大清の乾隆五十九  
年 日中の度改事七  
六年あり  
二子九百一十六年  
合て二百二十万〇  
二子百一十八年  
総て日中時代は  
茶敷をせめて  
和漢の類は其の  
例は六十八の年  
とあるは其の例

酒我持せるは茶小  
吳胡軍宿甲寅中  
日中の度改を二百  
七十六万二子百一  
年と云はむは其の  
右茶敷と定ると  
六甲の字を除くは  
四万六子令三十二  
はて第一級はせり  
例は宿甲寅より  
四万六子令三十二  
の甲寅當年は其  
茶あり

此は石を碎くは  
激しと云ふは  
京色をししは  
凡て色を山に  
激しと云ふは  
京色をししは  
凡て色を山に

此は石を碎くは  
激しと云ふは  
京色をししは  
凡て色を山に  
激しと云ふは  
京色をししは  
凡て色を山に



干支爻名 史記示雅 大同小異

甲 潤遼乙 朔蒙

丙 柔兆丁 彊梧

戊 徒維己 著雍

庚 上章辛 重光

壬 委默癸 照陽

子 困敦丑 赤奮若

寅 攝提格卯 單閼

辰 執徐巳 大荒落

午 敦牂未 協洽

申 潤灘酉 作噩

戌 剛戌亥 大淵獻

十二月異名

正 中 修 饗

純 陽 四 南 離 火

烹 葵 七 壽 生 辛

嘗 黍 十 享 雉 姻 茶

朔晦異稱

陽日 朔日 陰日 二日

潤日 三日 初風前 四日

初風日 五日 初風後 六日

人日 七日 佛日 八日

初雨前 九日 初雨日 十日

く月をこ山の影を

星尾日光筑波山

出羽れふ山角雁

水の沫く臨甲行れ

やゆく秩父大山

只く極多お根は白まれ

こく松の香もまくと

眼あつくと見是か

帰路を坂東一の

たの利ねに掛り



初雨後 吉 一 国日 三  
 水日 三 半所 五  
 半日 五 黑頭 六  
 上日 七 生松 八  
 月滅 九 念日 十  
 後元 十一 下天 十二  
 下地 十三 終風前 十四  
 文日 十五 惠日 十六  
 宿日 十七 神来 十八  
 定未 十九 晦日 二十  
 二十四番花信風  
 四月八日 氣一氣

三候之候名  
 一 梅花 小寒  
 二 瑞香 大寒  
 三 迎春 立春  
 四 望春 雨水  
 五 桃花 春分  
 六 棗棠 春分  
 七 蔷薇 春分  
 八 海棠 春分  
 九 牡丹 春分  
 十 芍药 春分  
 十一 石榴 春分  
 十二 蔷薇 春分  
 十三 木香 春分  
 十四 芍药 春分  
 十五 牡丹 春分  
 十六 芍药 春分  
 十七 芍药 春分  
 十八 芍药 春分  
 十九 芍药 春分  
 二十 芍药 春分

中 漱 志 渡 急 流  
 一 東 乃 乃 湖  
 二 忠 馬 駕  
 三 慈 服 与 息 女 性 友

記 山 乃 稿 詩 旅  
 一 出 反 韻 也 与 活  
 二 削 秋 飲 日 尔  
 三 身 少 今 一 希  
 四 省 好 乃 收 此 出 乃



海棠花  
牡丹花  
芍药花  
木芙蓉

清明

桐花  
麦  
沉  
柳  
花

穀雨

牡丹  
醉  
酥  
棟  
花

弄  
竟  
也  
八  
之  
夏

小  
之  
序

高井西  
我  
撰  
書  
誌



物  
之  
名  
公  
之  
書

夏  
之  
六  
名  
之  
書

高  
橋  
尚  
富  
之





